

# 昔話の中の「うた」

——「舌切雀」の場合——

一

本誌第五号所載の論文「昔話の中の歌謡」において真鍋昌弘氏は昔話の中の歌謡に、AⅡ本来昔話の中で創作されたもの、BⅡ本来昔話の外で伝承されていた歌謡を一部作り変えてとり入れたもの、CⅡ本来昔話の外で伝承されていた歌謡をそのままとり入れたもの、の三種があるとし、日本歌謡史研究の立場からさしあたって注意されるB、Cについて考察を加えられた。真鍋氏は一方で昔話の中には「囃子詞や唱え言も含めて、AあるいはA的なのが多い」とも指摘していられる。

小稿では真鍋氏の言われる「A的なもの」に相当するかと考えられる言語表現をも含めて、「歌謡」というよりは一段広い対象を扱うことになるので、とりあえず「うた」と呼ぶ概念を設定してその考察を試みることにしたい。

ここで「うた」とは、口承の昔話において、その前後の、いわゆる地の文や会話文の表現に比べてきわだった意味上のまとまりを有し、音程のあるもの、または音程が不確定であってもリズムのある

ものことである。

右の定義について一、二説明を補足する。まず「意味上のまとまり」を有するものとしたことよって、たとえば「桃がへどんぶりこどんぶりこ」と流れてきた」と語る場合のように、単に擬声語や擬態語の集まりからなる句などは「うた」と認めないことになる。擬声語や擬態語は音や動き（行動）を、それ自体として描写する。

昔話の「うた」も音や動き（行動）を表す部分に用いられることがあるが、単に音や動き（行動）それ自体の描写ではなく、その音や動き（行動）を話の中に意味づけて表現する機能を持っている。たとえば「瓜姫がへ爺さんさいがない、婆さんくだがない、ぎつとんばたらこ」と機を織った」（「瓜姫」島根・仁多郡）という語りの場合、単に機織りの音を描写するのではなく、瓜姫が爺・婆に「さい」や「くだ」をととのえてくれとねだり、爺・婆もその求めに答えるといった相互的な人間関係のもとで進展する機織り作業の状況を表す表現となっていると考えることができる。また「鼠がへ猫さえござらにゃ鼠の世盛あだ、へっさもっさ、へっさもっさ」と米を搗いでいた」（「鼠浄土」島根・仁多郡）という語りの場合、単に米搗ぎの動作や音を描写するのではなく、その動作を行う主体（鼠）

田中瑩一

の心情をもあわせ表現していると考えることが出来る。ただその際「爺のへそが、しじゅうがらすっぱらぼん、くわんがらもんがらすっぱらぼん、きり、かま、ちゃか、ぼん、びんご、びつちゅうと鳴った」(「鳥吞爺」島根・仁多郡)という語りの場合のように、全体として意味不明瞭なものをどう考えるかが問題となる。この場合は「しじゅうがら」「きり」「かま」「びんご」「びつちゅう」など、意味明瞭な単語を含んでいることに注目し、擬声語や擬態語による表現と區別して「うた」と認定することとする。このようなものの中には、本来意味明瞭な表現であったものが、伝承を重ねるうちに意味不明瞭になって来たという場合もあるうし、また、呪術的な機能を託された表現であったという場合もあるうと考えられる。

また、次のような問題もある。伝承された語り方の一部に様式化した語り口が認められる場合、これを「うた」と認定すべきかどうかということである。たとえば島根県八束郡美保関町七類に伝承される「桃太郎(山行き型)」の場合、怠け者の桃太郎を友達が山仕事にさそう部分を次のように語る。

モモタロサン　モモタロサン。ヤーマイカ　／　キョーハ、ニカワー　アマナイケン　／　モモタロサン　モモタロサン。ヤーマイカ　／　キョーハ、オイコー　コシラエンナラン……「モモタロサン　モモタロサン」という呼びかけは、早口に一息で語り、「ヤーマイカ」(山へ行こうの意)と、ゆったり、やさしげに続ける。これに対して桃太郎は、いかにもものぐさげに「キョーハ、ニカワー　アマナイケン」(今日には、かわを編まなきやならぬの意)と、二段に区切ってゆつくりと答える。以下、負い籠をこしらえる、わらじを編む(あるいは鉈を研ぐなど)と続ける。この対

話が、このような調子で語られ、それが聞き手に受け入れられるという過程を通して、桃太郎をさそう友人たちの善意ややさしさが、また、桃太郎のものぐさぶりが、聞き手の内部に、ある統一感をもって造形されることになると考えられる。この語り口調が七類地区の複数の語り手に共通であったということは、それがいわば様式化した語り口として伝承されていると言っていることなのであろう。その語り口には音程ないしリズムを認めることができる。しかしこの場合、「その前後の表現に比べてきわだった意味上のまとまりがある」表現部分とは考えられないので、これらは「うた」と認定しないのである。

次に「音程が不確実であってもリズムのあるもの」としたことから、狭義の歌謡や定型歌をも「うた」の範疇に含めて同一の観点から考えることが可能となる。ここでリズムとは、時間的に連続して生起する拍や旋律、あるいは言語(歌詞)の音韻上の単位をパターンとしてとらえたものである。

## 二

筆者はかつて、右のように定義される「うた」について、それが口承の昔話の中で表現上どのような機能を持っているかという観点から一つの分類試案を提示したことがある(『昔話に見られる「うた」の一分類』Ⅱ「昔話―研究と資料」第十号所収)。その際、「うた」の機能の違いを反映することがらとして重要と考えられたことの一つに次のようなことがあった。すなわち、かりにその「うた」を含む話を「骨格」(「何が―どうした」という事件の概要)だけに要約しようとする場合、ある種の「うた」はこれを省略した

り、あるいはその「うた」によって表わされている意味内容を別の表現——たとえば散文による表現——に代置したりすることができなければならない。他の種の「うた」はこれを省略したり代置したりすることができないということである。

たとえば先に引いた「鼠が」猫さえござらに鼠の世盛あだ、へっさもっさ、へっさもっさ と米を搗いていた」という語りの場合、その話の「骨格」は「鼠が米を搗いていた」と記述される。「猫さえござらに……」という「うた」は、鼠の、米を搗く行為をその心情とともに描写する機能は果しているけれども、話の「骨格」を構成する要素ではない。「うた」の部分を省略しても話の「骨格」をこわすことはない。前稿では筆者はこの種の「うた」を「描写としてのうた」と呼んだ。音や動き（行動）を描写する部分に用いられる。

また「爺の飼っている犬が」こおご掘れけんけん、ああそご掘れけんけん、と吠えた」（「花咲爺—山形・新庄市——」雀の仇討）野村純一・野村敬子編による——という語りの場合、その話の「骨格」は「爺の飼っている犬が、ここ掘れ、あそこ掘れと言つて吠えた」と記述される。つまり「うた」の表示する意味内容が話の「骨格」を構成する要素となつていてと考えられる。「こおご掘れけんけん、ああそご掘れけんけん」という「うた」の形自体はこわしてもいいけれども、「ここ掘れ、あそこ掘れ」という意味内容は省略できない。それを省略すると話の骨格がこわれる。前稿では筆者はこの種の「うた」を「表示としてのうた」と呼んだ。超人間的なものからの告知や、登場人物のはたらきかけあるいは詠嘆をあらわす部分に用いられる。

次に「娘が」恋しくば尋ねてござれ十七の国、腐れじ御門に夏の

虫と歌いかけた」（「難題掣」島根・仁多郡）という語りの場合、「恋しくば……」以下はその「うた」の形そのものが謎として提示されているのであって、これを省略したり別の表現で代置したりすることはできない。「うた」の形がそのまま話の「骨格」を構成する要素であると考えられる。前稿では筆者はこの種の「うた」を「要素としてのうた」と呼んだ。言葉あそびや鳴き声の由来、歌問答などの部分に用いられる。

小稿では以下に、前二者に属する「うた」について「舌切雀」の場合を例として考えてみたい。話の「骨格」から見れば省略されたり散文的な表現などに代置されたりする部分が、実際の語りの中で特に「うた」の形をとって表現されることにどのような意味があるかということを考えることになるだろう。その際、文字化される以前の資料につくことが望ましいと考えられるので、考察の対象を筆者の手もとにある「舌切雀」の六〇話ほどの録音資料に求めることとする。この資料はこの十年ほどの間に、島根県内で収録したものである。資料の数や範囲が十分でないが、とりあえず今後の考察の見直しをつけることを目的とした。

### 三

「舌切雀」は普通次のような順序で語られる。

① 爺の可愛がっていた雀の舌を婆が切り、爺がなげく。

② 爺が「雀や雀や小雀や、われがお宿はどこかいのう（島根・邑智郡）などといった「うた」をうたいながら雀を探しに出かける。

③ 途中、爺が牛洗いや馬洗いに出会い、牛や馬の洗い汁や小便を

飲めば雀の宿を教えてやるといった難題を出される。爺はそれらの難題をなしとげる。

④爺が雀の宿に行き、雀から歓待を受けて良い土産をもらう。

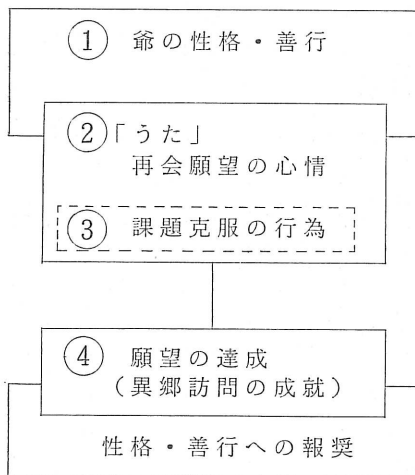
⑤婆が爺のまねをして雀の宿に行き、悪い土産をもらう。

手もとの「舌切雀」の録音資料六〇話について見ると、①④はほとんどの資料にそろっているが、②において「うた」を持つものは三五話、③の難題部分を持つものは一一話、⑤を持つものは四一話である。

このうち①が語るののは爺の性格（やさしさ）ないし善行（雀をかわいがる）であると解される。——婆の場合はその逆——。②の「うた」が語るののは爺の心情（爺と再会したいという願望）であると解される。——婆の場合は土産の宝物を手に入れたいという願望。以下婆については言及を省略する。——この「うた」は前述の「描写としてのうた」であって、話の「骨格」を構成する要素ではない。省略しても事件の展開が伝わらなくなることではない。ただ、ここにこうした「うた」の形の表現が置かれることによつて、雀に再会したいという願望を抱いて歩く爺のすがたが具体的な像として描き出されることになっていると考えられる。心情は地の文や会話文によつても表現できる筈だけれども、マックス・リュネイの指摘にもあるように、昔話はそれを裸で語ることをしない。「性質や感情は話のすじのなかで表現される」（マックス・リュネイ『ヨーロッパの昔話』小沢俊夫訳）のである。口承の昔話においては心情の表現は「うた」に託されることも多いと見られる。口承の昔話において地の文や会話文はいわゆる可変部分であつて、そこに心情表現を託すとなれば語り手の恣意による変容を避けることができない。それが「うた」であることによつて語り口までを含めて

表現の形が安定し、ほぼ一定の内容が伝承されて行くことになると考えられる。③では、爺は、なみの人間にはできないような課題を一つ一つ克服し、その都度前記の「うた」をうたひながら進むように語られるのが普通である。このように、②—③の組みあわせによる表現がとられることによつて聞き手は、爺に強い再会願望の心情があるからこそ困難な課題を超人的に克服できるのだと納得するのであろう。こうして爺の超人性——なみの人間とは違う、選ばれた人間であるという意味づけ——が具象化されることによつて、④における、爺が雀の宿という超現実の世界（異郷）へ入るといふ展開も自然に受け入れられるものと考えられる。④は構造上、右①②③を受け、爺の行為を完結させる意味を持つ。即ち、①で語られた爺の性格上の好ましさや善行に対する報奨という意味を底に持ちつ

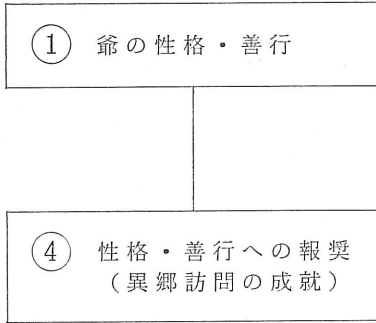
第一図



つ、直接には②及び③で語られた、強い再会願望を持ち、その実現のために行動する具体的な爺の像と呼応し、その願望の達成されたすがたとして、ある成就感をもって配されていると考えられる。以上のような関係をかりに図示してみれば第一図で示されるような枠組みとしてとらえられるだろう。

③の欠落した語りでは爺の超人性の具象化がなされなかったために、④から、爺が自らの願望を達成させた成果という成就感を受けとることが困難になる。④をもたらしただものは爺の意欲や力ではなく、雀の力であるという印象が強く、そのため①で語られた爺の性格や善行への報奨という意味が表に出てくることになると考えられる。この傾向のいっそう強いのが②③をもとに欠落させた語りである。この場合、爺の再会願望の心情自体が語られない（あらずじ風に述

## 第二図



べられることはあっても）わけで、④が①と直接呼応することになる。この場合、④は再会願望成就のすがたという意味を失い、性格や善行に対する報いという抽象的な枠組みを浮き出させることになる。以上のような関係をかりに図示してみれば第二図で示されるような枠組みとしてとらえられるだろう。

ところで今日伝承されている「舌切雀」の中には③の難題克服の行為は語るが②の「うた」を欠くものが見られる（手もとの資料では六話。この種の語りの中に、次に、例示するように、話全体が笑話化しているもののあることに注目したい）。

○爺と婆がつづらのほごの中へリンゴやバナナをたくさん入れて雀を迎えに行く。牛洗い、馬洗いの難題を克服して雀の宿に行き、つづらにいっぱい土産をもらって帰る。爺のつづらには良いものが、婆のつづらには蛙や蟹やくちなわが入っている。のち婆は悔いて雀を呼びもどし可愛がるようになった。（島根・邑智郡）

○爺が舌切雀を探しに行く途中、牛洗いに会い難題を出される。それを克服すると次に馬洗いに会い難題を出される。それを克服すると次に犬洗いに……以下、猫洗い、兎洗いと続き、果てなし話となる。（島根・大田市）

はじめの例では、爺・婆が二人そろって雀の宿探しに出かけるように語られ（従って両者の心情のなかみ——その違い——は問題にならない）、リンゴやバナナまで持参して、まるでピクニック気分とでも言えるような逸脱がある。あとこの例では、難題克服の行為の反復自体に興味に移ったため、全体が果てなし話になっている。いずれの場合も「舌切雀」とは別の話に変容していると言わざるを得ない。これは、爺の、雀との再会を願う心情を表現していた「う

「た」が脱落したために、心理上必然性をもっていた枠組みがこわれ、爺の行為の基本的な動機が消滅したための変容であろうと考えられる。

以上は心情表現の機能を託されていると考えられる「うた」の有無が物語の質を変えることのある一つの場合を見たのである。

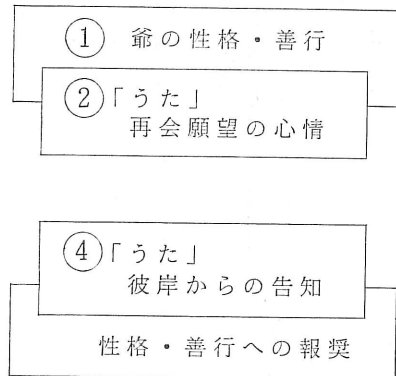
「舌切雀」にはいま一つ、④を次のように語るものがある。

④爺が雀を尋ねて歩いていると、爺ならしっちゃんちゃん、爺なら部屋の前には櫃があっけに開けてみやんな という「うた」が聞こえる。爺が開けてみると銭や小判が入っている。(島根・隠岐郡)

ここに見られる超人間的な告知を表す「うた」は、前述のいわゆる「表示としてのうた」であって、それによって表示される意味内容が話の「骨格」を構成する要素となっている。この種の語りは今のところ手もとには隠岐島西ノ島町の三例しかないが、共通して次のような特徴が認められる。まず、爺の再会願望の心情を表す②の「うた」はあるが難題克服の行為を語る③がない。次に雀を尋ねて行った爺は雀の宿の近くまで行ったように解されるが雀の宿に招き入れられることはなく、異郷訪問は達成されないまま超人間的告知を伝える「うた」(声の主を舌切雀と語るものもあるが、何物とも語らぬものもある)の指示を受けて宝物を手に入れる。つまり爺は雀との再会を願いながらも結局現実の世界(此岸)にとどまったままであって、その爺に彼岸からの告知がもたらされ、爺は此岸の世界において報奨を得るのである。前述の図式にならってかりに図示すれば第三図で示されるような枠組みとしてとらえられるだろう。

③の欠落した語りの場合に見たようにこの場合も②の「うた」に

### 第三図



よって爺の心理的な動機は語られているけれども、それにもとづいた難題への挑戦③が語られていないために爺の意欲や力がクローズアップされることはない。④の「うた」による告知は爺の此岸における行動の成果として得られたのではなく、爺の性格の好もしさといったものへの報奨として彼岸からもたらされたという意味を持つている。

「日本昔話通観」(稲田浩二・小沢俊夫編)はモチーフ構成の上から難題部分の有無を重視して「舌切雀」に「隣の爺型」(難題部分のない型)ないし「試練型」(難題部分のある型)といったサブタイプを認めている。しかし小稿でとってきたような、語りの意味構造という観点から見ると、先に見たように、難題部分③は「うた」②に従属する位置を出ないわけで、難題部分の有無を

特に重視する必然性がないように考えられる。それよりはむしろここで見たように、④に異郷訪問を語るか、④に告知の「うた」を持つかということが重要な相違と考えられる。この観点からサブタイプを認定するとすれば、「異郷訪問型」(②-④の型)と「告知型」(②-④の型)が区別されることになるだろう。含まれる「うた」の相違がサブタイプの相違と対応することになるわけである。

付記

小稿は一九八〇年七月六日、奈良教育大学における昔話研究懇話会第十三回大会において『昔話に見られる「うた」の諸相——文学性と音楽性——』という題で筆者と田中裕子とが共同で口頭発表したもののうち、筆者が担当した部分の一部を書き改めたものである。なお論述の都合上、拙稿『昔話に見られる「うた」の一分類』(『昔話——研究と資料——』第十号所収)と重複したところがある。

(たなか えいいち・島根大学)

### 『口承文藝研究』在庫誌(各千円)

#### 第三号

中国地方の神楽における託宣……………	牛尾三千夫
ユンタの語義をめぐって……………	狩俣 恵一
隠岐島の昔話……………	酒井 董美
佐藤家の昔話……………	武田 正
フランスの昔話——聖母マリアと妖精——……………	長野 晃子
南島における子供の寿命譚……………	丸山 顯徳

〔書評〕

崔仁鶴著『韓国昔話の研究』……………	荒木 博之
内田るり子著『田植ばやし研究』……………	大貫 紀子
……………	真鍋 昌弘

〔海外通信〕

国際口承文芸学会	
第七回世界大会の報告……………	小沢 俊夫
伝説の分類——日本とフィンランドと——……………	高橋 静男

#### 第四号

昔話の表現法にふれて……………	藤原 与一
歌われる歌としての日本民謡……………	小島 美子
伊豆の民謡——稲作習俗と田唄——……………	石川純一郎
カレン族の歌謡……………	内田るり子
沖繩の始祖伝承……………	遠藤 庄治
広島県の昔話の現状	
——その語り口を中心に——……………	村岡 克彦
民間説話の変貌——洛陽橋にまつわる	
物語について——……………	施 翠 峰

〔書評〕

小沢俊夫編『世界の民話』(全二五巻)、	
関敬吾・荒木博之・山下欣一監修『アジ	
アの民話』(全二巻)……………	大林 太良
『南島歌謡大成』(全五巻)……………	狩俣 恵一
〔海外通信〕	
日本口承文藝學會訪中団の報告……………	飯倉 照平